

平成四年十二月六日(日) 郷土研究会資料

第一九六回 史跡めぐり

醤油のまち野田市を訪ねて

越谷市郷土研究会

第一九六回 史跡めぐり案内

日時 平成四年十二月六日 (日)

集合 越谷駅東口前 午前八時五十分

(九時〇二分発下り准急に乗車)

行先 野田市野田

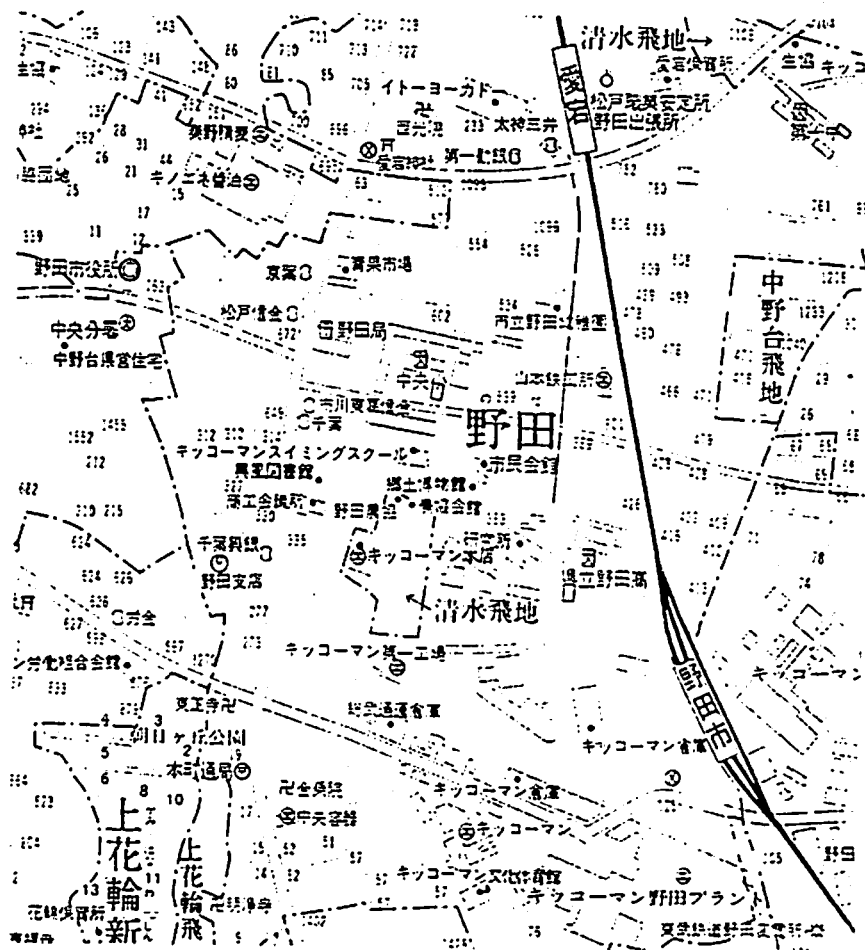
コース 越谷駅ー春日部駅ー野田市駅ーキッコーマン野田工場ー野田市郷土博物館ー愛宕神社(昼食)ー西光院・勝軍地蔵尊ー愛宕駅ー春日部駅ー越谷駅

参加費 一、二〇〇円 (交通費、資料代その他)

案内者 理事 鈴木 秀俊

主催 越谷市郷土研究会

(野田市街地図)



野田市



千葉県北西端にあり、醤油の街としてよく知られている。南は柏・流山の両市、北は東葛飾郡関宿町と接し、北東は利根川を隔てて茨城県に、西は江戸川を境に埼玉県にそれぞれ対している。面積は七三、八五平方キロ、人口は一六、七〇三人（平成四年十月一日現在）。

昭和二五年五月、野田町、旭村、梅郷村、七福村を合併して市制を施行。翌年一月、川間村舟越の一部を編入、昭和三三年四月、川間村、福田村の両村を野田市に編入合併して今日に至っている。市章は公募により、野田市の頭文字の「の」に平和と円満を願う凶案化したものである。

市域の大部分は海拔二〇米前後の、なだらかな丘陵・台地によって占められるが、江戸川と利根川沿いの一部には、低平な沖積低地がひらけている。西寄りの江戸川東岸の台地面に、野田の中心市街が形成されている。

野田市街の都市的起源は、近世の江戸川舟運の河港で、その初期のころ醤油醸造が始められ、中期には盛んに江戸に送られるようになり、関西醤油に代わって江戸市場を独占するまでになった。

今も醤油醸造が市の中心産業となっているが、市街背後の台地面では野菜・タバコ栽培、谷田や江戸川・利根川沿いで稲作と、農業も盛んである。近年、東武野田線沿線の宅地化が進展し、人口が急増している。

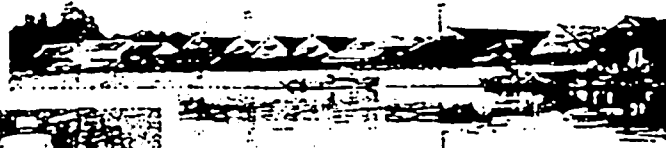
見どころとしては、桜の名所清水公園、金乗院、また公園入り口に移築された旧花野井家住宅（重文指定）。他には、ばっばか獅子舞（県民俗）、野田貝塚（県史跡）などがある。

野田の醤油

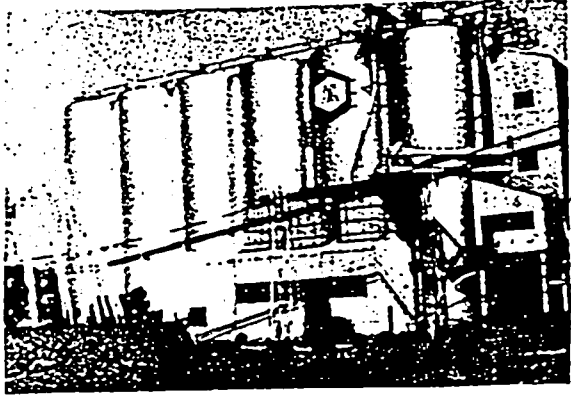
野田といえば醤油、醤油といえば野田というぐらい、野田市は醤油の街として有名である。

野田で醤油が初めて造られたのは、永禄年間（一五五八―一六九）、この地方の豪農飯田市郎兵衛なる者が、溜

明治年代江戸川沿いに
並ぶ醤油蔵の風景



原料サイロ



醤油を造り甲州の武田勢に納められ、後に「川中島御用溜醤油になつた」と伝えているが、寛文元年（一六六一）に上花輪村名主の高梨兵右衛門が醤油造りを始めたのが、野田醤油の事実上の始まりといえる。

茂木七左衛門は宝暦三年（一七五三）に味噌醸造から醤油醸造に転じ、明和元年から安永元年の間、高梨家、茂木家が合同して醸造業を営んでいる。安永四年に大塚弥五兵衛、杉崎市郎兵衛、竹本五郎兵衛等が醤油造りを始めた。天明二年には甲田三郎兵衛から分家して甲田治郎兵衛も味噌醸造を始め、後、醤油造りに転業している。野田の醤油は、江戸川の開通により地理的条件に恵まれ、大消費地にも近いため大いに販路を開拓することができた。

生産量は年々増加して天明元年（一七八一）には、野田造醤油仲間が成立している。その仲間は、

亀屋市郎兵衛（飯田）、高梨兵左衛門、柏屋七郎右衛門（茂木）
茂木七左衛門、大塚弥五兵衛、杉崎市郎兵衛、竹本五郎兵衛、
の七人であった。キッコーマン印の茂木佐平治が醤油醸造をはじめたのは天明二年（一七八二）のことである。

天保三年（一八三二）の造家は十八軒、醸造高二万三二五〇石を数える程に発展し、その間に高梨兵左衛門家、続いて茂木佐平治も幕府御用丸の御用醸造の下命される程になっていた。

明治六年（一八七二）野田の茂木佐平治家の亀甲勇が、初めてウイーンの万国博覧会に出品して、名誉賞牌を得たので、ますます著

名となった。国内においても産業奨励のため博覧会、品評会、共進会等が盛んとなって、各地とも品質を改良する風風が起り、醤油醸造の技術も大いに進歩をみるに至った。野田の醤油も次々と最高賞を受賞し、名声は大いに上がって来た。明治二十年柏家が邸内に私設の化学試験所を設け、醸造工程の技術的進歩に貢献している。同年六月には野田醤油醸造組合が成立した。この組合は醤油醸造業の発展に尽力したばかりでなく、その財力を活用して永く地域社会の発展に寄与した。

以後、この組合によって興された主な事業を挙げてみると、

野田商誘銀行、野田人車鉄道kk、野田醤油醸造試験所、野田―柏間県管輕便鉄道敷設（明治四四年、東武野田線の前身）、野田組合倉庫kk（現在の総武通運kk）、野田病院、水道施設等があった。

大正三年に勃発した欧州大戦もまた大戦景氣を現出し、醤油醸造業界も未曾有の好況に恵まれたが、業界にも改新的氣運が台頭し、野田においては逸早く茂木、高梨一族八家が醤油企業の間合を成立させ、大正六年十二月七日野田醤油kk（昭和三九年、キッコーマン醤油kkと改称）を設立発足させたのであった。

爾來順調に發展して代表マークであるキッコーマンは、いまや世界的商品として海外八〇余カ国に輸出され、日本の輸出醤油全量の九〇%を占めている。昭和四七年にはシカゴ市の郊外ウイスコンシン州ウォルワースに、キッコーマン醤油の醸造工場を新設し、アメリカ全土及びカナダの需要に應えるようになった。

この他に、野田の醤油醸造業としては、天保元年（一八三〇）に創業した現在のキノエネ醤油kk。大正十四年五月創業した窪田味噌が、昭和八年四月醤油醸造をも始め昭和二五年法人組織とした窪田味噌醤油kk等がある。

野田市市立郷土博物館

野田市駅の北西、徒歩約七分の所にある。醤油醸造家茂木佐平治氏の邸宅を譲り受け、その敷地内に建てたもので、家屋敷の部分は市民会館となっている。昭和三四年、皇太子殿下の御成婚を記念して落成、開館された。

建物は二階建てで、一階には野田市を中心とする考古・歴史・美術・民俗資料。二階には主として野田醤油に
関する諸資料が展示されている。

※郷土博物館の西隣、遊樂園には釋尊堂という額を掲げた小堂がある。堂の外壁と御手洗舎の彫刻は素清らし
い。彫刻師 行徳 後藤直光

愛宕石神社

旧村社で、延長元年（九二三）山城国（京都府）の愛宕山（愛宕神社）の迦具土命（かぐつちのみこと）の御
分霊を奉祀したのが始まりという。古くから火伏・五穀豊饒・安産子育ての産土神として、土地の人々の崇敬を
集めている。

今の権現造りの社殿は、文政七年（一八二
四）に再建されたものである。

神社の境内には句碑・歌碑が五基。

◇ 三光の外は桜の花明り 風々舎鉄扇

俳諧に遊へるも四十余年、身は市井にあり
なから、心は姥捨の月に詠し、身は吉野の
花に吟す

◇ 百年のけしきを庭の落葉かな はせぞ

西行の庵もあらんはなの庭 芭蕉

◇ 聲かきりなけ郭公神の森 茂木佐平治

◇ あらそはぬ風の柳の糸にこそ

堪忍袋ぬふへかりけれ



台賜宗匠真顔（江戸時代後期の狂歌師 鹿部部真顔）

◇ 涼しきやほの三日月の羽黒山 芭蕉

※神社の境内から北の西光院へかけての七、三六〇平方尺は愛趣園といわれ、市民の憩いの場となっている。

西光院

真言宗豊山派の寺院で、本尊は聖観世音。愛宕神社と西光院は今では分れているが、もとは同じであった。

延長元年（九二二）に山城国愛宕山から迦具土命の神霊を分祀したのが、この神社と寺の始まりと伝えられる。当時山城国愛宕山は、密教の道場として迦具土命を祀り、本堂には将軍地藏菩薩を安置して本地とし、愛宕大権現と称して本地垂迹の典型的な道場、神宮寺であったらしい。

寛永二十年十月五日、第十四世有賢が再興した。文政七年、第十九世真海が愛宕神社の建立を願い出て、次の実相の手によって神社は完成したと言う。

明治元年の排仏毀釈による神仏分離以前の記念碑をはじめ、神仏混交の歴史を語る記録が多く残り、本地垂迹の現存する典型的遺跡として全国的に珍しいものである。本地垂迹とは、行基や空海によって唱えられた説で一神と仏とはもともと同じもので、インドが神の本地であり、民衆を救うために仏が神の姿となって日本に現れた」というものである。



西光院

本堂近くの小堂に「勝軍地藏尊」が祀られている。馬上甲冑をつけ、右手に錫杖、左手に如意宝珠を持った珍しいもので、戦勝を祈願した、と伝えられている。堂の右側には、^{向かって}昭和十五年四月に建てられた埼玉県大沢町新勝講の参拝十週年記念「武運長久講中安全」の碑がある。

またこの寺は新四国八八カ所霊場になっていて、その由来を示す碑が立っている。この碑の近くに弘法大師の修業像が立ち、それと向かい合うように「至徳泉碑」が建てられている。

碑には「原泉混々」と明治三八年に書かれた伊藤博文の書が刻まれている。文面はほぼ次の通り。
「明治三十五年夏季、冷害暴風雨等のため住民困窮し、飢渴に瀕するもの多く、蒼翁はこの救済の一端として私財を投じ、この地に突井の開鑿を起こした。一年半かかり、同三十七年八月二十三日、遂に清冽な地下水の湧出を見、飲料水の資源を確保した。また仕込用水の先駆となり、野田の醤油発展に貢献、至徳泉と命名された。元勳伊藤博文は特にこの功績をたたえ書を寄せられた。明治百年を記念してその真蹟を刻み、この碑を建てた」。建碑は昭和四三年十二月八日で、書はキーマンの茂木啓三郎。碑の近くが泉の跡らしく、現在は小さい池となっている。

なお、すぐ近くに「茂木蒼翁之碑」もある。蒼翁とは茂木啓三郎（号秀山）のことで、文久三年（一八六三）野田町醤油醸造業の家に生まれ、業界の発展に貢献した人。昭和十年八月三十日、七四歳で他界した。



徳川幕府 御用看板

参考文献

千葉大百科事典

千葉日報社

観光と旅・郷土資料事典（千葉県）

人文社

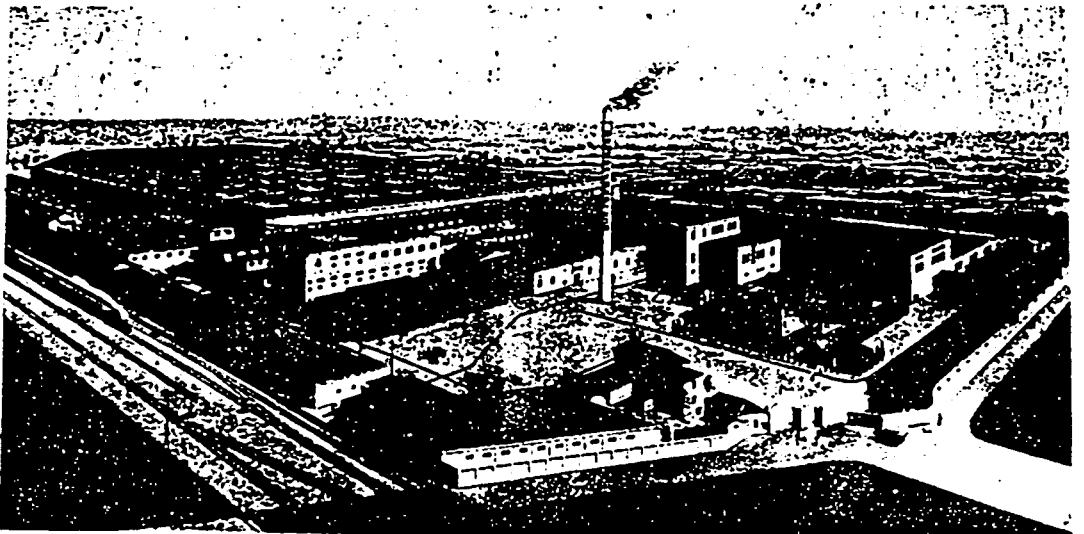
野田の醤油

野田市郷土博物館

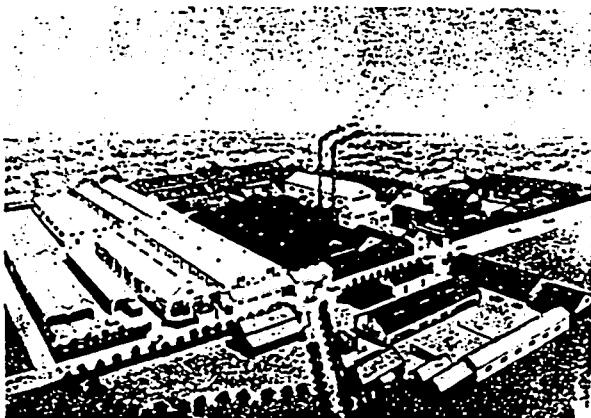
編集

鈴木 秀俊

大日本名所図絵
に紹介された野
田醤油。3代広
重筆の版画



キッコーマンオセ七工場
大正15年4月2日竣工。最新
式立体工場として日本に於け
る画期的なものであった。



キノエネ醤油工場
天保元年山下平兵衛創立。
昭和46年5月株式会社とする。